



Title	池上二良先生のアイヌ語研究
Author(s)	佐藤, 知己
Citation	北方人文研究, 5, 205-211
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/49318
Type	bulletin (other)
Note	シンポジウム報告
File Information	15journal05-satoh.pdf



[Instructions for use](#)

池上二良先生のアイヌ語研究¹

佐藤知己

北海道大学大学院文学研究科

1. はじめに

池上先生の御論文の中からアイヌ語に関わる主要な指摘を主な主題別にまとめてみた。また、単なる紹介だけでは学問的な意義という点から言えば不十分なので、以下ではアイヌ語の専門家の立場から、また、今日のアイヌ語研究の観点から、問題点や情報の補足を試みることに努めた²。

2. アイヌ語の方言をめぐって

池上（2004：195）（「アイヌ語の輪郭」、1969年）には、既に話者が失われてしまったアイヌ語根室方言についての言及があり、当地の通辞として代々活躍した加賀家の所蔵する加賀家文書が根室方言を知る手掛かりとなるのではないかと指摘している。加賀家文書については筆者もアイヌ語研究者の立場から長年関心を抱いて来たが、量が膨大であることと話者がいない方言であるため、研究が困難であるという理由で、いまだにほとんど研究できずにいることは残念である。しかしながらこれまでに僅かながら行って来た研究から、池上の指摘を支持する具体的な例を以下に挙げておく。

加賀家文書が根室方言を反映しているかどうかを知るには、時代差の問題もあるが、確実に「根室方言」であると断定できる資料がまず存在していることが前提となる。この点に関しては、近年、関係者の努力によって徐々に資料が発掘されて少しずつ進展が見られるようになった。豊原他（1996）には根室の郷土史家であった伊藤初太郎氏（1883-1976）が昭和11[1936]年に発表した『根室蝦夷の博物語遺集（ママ）』（私家版）という著作が翻刻紹介されている。豊原他（1996：92）によれば、北海道史の権威として高名な河野常吉氏が昭和三年に根室へ来た時、「年来の心掛けであった根室アイヌの語を聞いて置きたいから」と依頼されて「根室居付のポロモンリアアイヌで唯一人の老生存者である富士スミの家へ案内」し、アイヌ語を調査したという事情が述べられている。従って、この資料は、根室地方で行われたアイヌ語方言の確実な資料の一つと言えるであろう。詳細な分析は今後の課題であるが、採録された単語の中に「レタンケップ ウバユリ団子ヲ肉油ムクサ等ト煮タアイヌ一番ノ御馳走」とあるのが注意される（豊原他 1996：103）。服部（1964）によれば、美幌方言に *retaskep* 「まぜごはん」という形式が報告されており、知里（1976：136）にも塘路方言に *retaskep*（野草料理）という形式のあることが記されている。伊藤氏の資料中の「レタンケップ」はおそ

¹ 本稿は2011年12月17日に北海道大学で行われた池上二良先生追悼シンポジウム「北方言語研究の歩み」における筆者の発表に基づいている。その折御意見をいただいた方々に感謝申し上げます。

² この分野の大家である池上先生に対して知識や能力のはるかに劣る筆者がこのような態度を取ることは世俗的な観点からは不敬であり僭越であることは重々承知しているが、池上先生ならばたとえ拙劣なものであっても、それが学問的観点からなされたものである限り、（厳しく反論や叱正はされたであろうけれども）お許し下さったであろうと思うし、おそらくはかえって喜ばれたのではないだろうか。なお、以下、特に断らない限り、池上先生の御論文のページは池上（2004）による。

らく美幌方言や塘路方言の *retaskep* に相当するものであろう。実は加賀家文書の中にもこの形式に相当するとみられる例がある。佐藤（2005）は江戸時代の北海道東部地方方言と西部地方方言の差異を明らかにしようとする試みであるが、そこには加賀家文書に含まれる二つの「申渡」のアイヌ語訳の分析が含まれている。そこで分析対象を「申渡」に限定したのは、地元のアイヌ人に内容を確実に伝達するという目的上、この種のテキストにはその地方の方言が強く反映されているであろう、という予測があったためであるが、この中に「レタシケブ 作物」、という語が二例見られる（佐藤 2005：14, 23）。*retaskep* という形式は美幌方言や塘路方言にも見られるので、根室方言だけに限定される形式ではないが、伊藤氏の根室方言資料の形式と加賀屋文書の形式が一致し、それが周辺の道東方言にも報告のある形式であるということは、やはり加賀家文書の少なくともあるものが根室地方の方言を含むという予測を裏付けるものと言えるであろう。ここではたった一つの形式を指摘したに過ぎず、今後も様々な資料を併用することによって加賀家文書を分析し、この地方のアイヌ語方言の特色を明らかにして行く必要があると思われる。

池上（2004：233）（「十九世紀の樺太西部の住民について」、1995年）は、樺太方言についても興味深い指摘を行っている。松田伝十郎「奥地見聞」（1808）に記録されているアイヌ語樺太方言の語「シンジツ」について、「この語形はタライカ方言の *sincit* [ʃindʒit]（根）（故東ムラさんによる）に一致して北海道方言の *sinrit*（根）と異なり、また語末が *t* であることは樺太の他方言で *t* でなく一般に *h* が対応するのと（またライチシカ方言 *sinris* と）異なる。シルングルが使ったアイヌ語方言は西部にあっても東部のタライカ方言に連続するもののように見える」と述べている。ここで注意されるのは、江戸時代の他のアイヌ語の記録である。例えば、最古の刊行されたアイヌ語辞典である上原熊治郎の『藻汐草』（寛政四 [1792] 年刊）には、「根 シンジツ」とある。優れたアイヌ語通辞として広く活躍した上原は恐らく樺太方言にも通じていたであろうし、樺太タライカ方言の *sincit* のような語形を実際に耳にしたことがあった可能性も大いにある。しかしながら、『藻汐草』において、上原が特に樺太方言に傾斜した語彙選択をしているという明らかな傾向が現段階においては認められないことからすれば、むしろ北海道方言にみられる *sinrit* あるいは *sinrici*（所属形）のような語形が、当時の日本人にとっては「シンジツ」という仮名表記で書き表わすのが妥当であると判断された可能性も否定できないと思われる。また、池上（2004：233）は末尾の「ツ」を *t* と見て、他の樺太方言と異なり、語末の閉鎖音が *h* に変化しなかったタライカ方言の特徴を示すものと考えているが、これも上記 *sinrici* のような末尾に *i* を持つ所属形（「～の根」）を表記した可能性を考慮すべきであろう。「根」は植物の部分名称であり、*sinrit* のもう一つの意味である「先祖」もまた親族名詞であり、共に所属形（*sinrici*）を取る可能性が極めて高いと考えられるからである。また、微細な音声学的特徴や音韻論的解釈の問題はしばらく置くとしても、*n* のような鼻音に後続する *r* 音（細かな音声学的規定には勿論問題はあるが）が閉鎖性を強め、場合によっては完全に閉鎖音化する可能性は他の位置よりも一般に高いのではないかと考えられる。なぜなら、鼻音は呼気を鼻腔に通すため、*r* 音を維持するために必要な呼気が不足するので *r* → *c*（アイヌ語には **ti* という連続はない）という変化、あるいは閉鎖性を強める傾向が他の位置よりも起こりやすいのではないかと考えられるからである。つまり、「シンジツ」と書かれていても、それがタライカ方言にのみ特有な *sincit* という形式に一意的に該当すると考えるには不利な要因があり、なお慎重に考察すべき問題ではないかと考える³。

³ 発表終了後、某氏より「池上先生から借用したタライカ方言の音声資料では確かに池上先生の

池上 (2004 : 200) (「アイヌ語系統論」、1973 年) はアイヌ語の方言を記録した古い在外資料について触れ、「わたくしは 1969 年にレニングラードの国立公共図書館で F. Adelung の 'Kurilisch' と題する稿本をみることができ、同図書館の好意によりその写真をうることができた。それは未刊とおもわれるカラフト・千島の方言資料を含んでいる」と述べている。以下にこの稿本に関する概略的な調査結果を述べる。

この 'Adelung の稿本' の複写は北海道大学附属図書館に所蔵されている。1 ページから 38 ページまではロシア語・アイヌ語対訳語彙集である。アルファベット順に配列された語彙が一枚のカードに十数語ずつ書かれている。次のダヴィドーフの語彙集からの写しと見られるが (p.3 に「フリゲート艦ユノナ号によって 1806 年に採集されたサハリン語辞典」という文句が見られる)、表記が必ずしも同一でない点が注目される。あるいはカードのほうがよりオリジナルに近い情報を含むものである可能性もある (例 : тумари 「湾」、後続のダヴィドーフ語彙では томари、クルーゼンシュテルン所載ダヴィドーフ語彙でも томари、また、чоокай отта ируша 「少しの間私によこせ」、後続のダヴィドーフ語彙では чоокай отта іоруша、クルーゼンシュテルン所載ダヴィドーフ語彙では тоогай отта іоруша、ちなみに erusa は「貸す」[千歳方言])。39 ページから 74 ページ左まではダヴィドーフの「サハリンアイヌ語辞典」(クルーゼンシュテルン『世界周航記』、1812 年サンクトペテルブルク刊所載、露文) の写しである。ただし、ロシア語の見出し語の後ろにドイツ語訳が付されている点は出版されたものと異なる。74 ページ右から 75 ページまではラングスドルフ『世界航海・旅行記』中の「アイヌ諸グループ間で話される言語の見本」(村山 1971 による) の写しである。76 ページには 4 枚のカード (おそらく大部分がドイツ語) が載るが、少なくともそのうちの 1 枚はシュテラーの『カムチャッカ地誌』(村山 1971 による) からの写しと思われる。77 ページから 82 ページまでは「クリル語辞典」と題されたロシア語・アイヌ語対訳語彙集 (今のところ出典不明)。ただし、「山」を нубури としているなど、これまでに知られている千島方言の形式 (例えば村山 (1971) に整理されている鳥居龍蔵採録資料では shitokoi) と異なるのであるいは千島方言の資料ではないかもしれない。83 ページから 84 ページはクリル諸島の住人及び島名に関するラテン語の記述 (シュテラーの名前が見えるのでおそらくは前述のシュテラーの『カムチャッカ地誌』と関連のあるものか)。85 ページから 86 ページまではドイツ語とクリル方言、サハリン方言、マツマイ方言との対照語彙表 (出典不明、村山 (1971) の情報を元に推測すれば、おそらくはクラブロート『アジア・ポリグロッタ』からの引用か)、87 ページ左はサハリン方言の語彙に関する二行の短い説明 (出典不明)、87 ページ左から 89 ページ左までは「近隣諸島のクリル方言」と題されたドイツ語・アイヌ語対訳語彙 (出典不明、同様に、おそらくはクラブロート『アジア・ポリグロッタ』からの引用か)。89 ページは出典に関するドイツ語の記述 (サハリン方言についてはダヴィドーフ、クリル方言に関してはクラシェニンニコフ、クリル諸島名についてはシュテラーの名前が記されている)。

ご記述通りであり、t で終わる概念形が単独で現れることもあるのでここでの批判は当たらないのではないか」というご注意をいただいた。しかし、遺憾ながら筆者には某氏の指摘は論理性や客観性を欠いたものに思える。-t で終わる語形が単独で存在し得るということはあり得る可能性の一つに過ぎないのであって、それをもって結論も正しいとするのは論理の飛躍である。また、なぜ某氏は筆者の指摘した藻汐草の例や音声学的な問題は全く無視されるのであろうか。筆者の指摘の趣旨は「シンジツ」という仮名表記を一意的に証拠と断定することにはこの場合無理がある、ということであって、その点は某氏の指摘によっても依然状況に変わりはないと考える。なお、ここでは、単独で発話された親族名詞の子音で終わる概念形の例を得るのはそれほど容易でない、という事情も考慮すべきであらう (樺太方言では事情は異なるのであろうか)。

以上を総合すると多くの部分は必ずしも未刊のものではないので、「未刊」という表現は必ずしも適当でないとと言える。「公刊されたものも多く含むが、細部には公刊されたものと微妙に異なる点もあり、貴重な情報を含んでいる可能性がある」とするほうがむしろ妥当と思われる⁴。

3. アイヌ語の構造をめぐって

池上(2004:196)「アイヌ語の輪郭」、1969年)は、アイヌ語の文法構造に関して(接頭語)+自立語+(接尾語)+(附属語)という枠組みを設定している。これは池上も述べているように服部(1961)に依拠したものであるが、現在でも「人称接辞」と呼ばれることがある、名詞や動詞に接合して人称を意味する形式を池上も服部同様に「接頭語」、「接尾語」のような「接語」として扱っている点が興味深い。服部(1961:9)は e-ponno poro setaha (喉音音素記号は省略)「お前の少し大きな犬」のような形式が存在するので、ponno poro「少し大きい」のような句が e-「おまえの」と setaha「~の犬」の間に入り得ることを理由に e-「おまえの」のような人称要素を「接語」という語の一種として扱い、接辞としない立場を取る。しかし、服部の指摘には全く問題がないわけではなく、なおも検討が必要な部分を含んでいると言える。まず、服部も認めているが、e-ponno poro setaha という形式は、話者によって「可」と位置付けられており、ponno poro e-setaha が「良」と判定されているのに比べると容認可能性が低いという点である。また、服部の出している例は、名詞の例のみであり、動詞に関しても名詞と並行的な現象が存在するのかどうかは明らかでない。また、カラフト方言以外の方言で類似の現象があるののかも明らかでない。これらの点で服部の主張はなおも検討が必要な部分が残ると言えるのではないだろうか。少なくとも筆者の調査した千歳方言に関しては人称接辞と語幹との間に自立語が自由に入るという確実な例は見出すことができない。日本語の附属語のように、「その本(とても高価だが)が欲しい」、「明日(つまり12月18日)もとても寒いだろう」のような例がアイヌ語で自由に起こるとは言えないように思う。この問題はアイヌ語学において既に解決済みの問題とは必ずしも言えないのではないかと。池上の指摘の重みは重みとして受け止めつつ、なおも検討を続ける必要があると言える⁵。

4. アイヌ語と近隣諸言語との関係をめぐって

池上(2004:209)「アイヌ語のイナウの語に由来に関する小考」、1980年)は、アイヌ語の inaw「ご幣、削りかけ」に関する論考である。アイヌ語と近隣諸言語との関係について、説得力のある仮説を述べており、アイヌ語、アイヌ文化の起源を考える上でも画期的な重要性を持つものと言える。概略的な結論部分だけを引用すれば、「illau と ilau の語とアイヌ語のイナウの語が、元来同じ語であるとみる見方に立つと、両言語がこの同じ語をもつことになった由来が問題となるが、アイヌ語のイナウは、ツングース語のこの語をアイヌ語にない

⁴ 手元に原文があったのはクルーゼンシュテルンのみであり、その他の文献に関する情報は村山(1971)に依拠している。本格的な検討にはあらためて原文と対照する必要があるが、ここでは推測も含む予備的な検討の結果を示した。

⁵ ここで扱わなかった点として「譲渡可能・不能」という用語をアイヌ語に初めて適用したのは池上先生であると思われるので、その点にも触れるべきではないかという御注意をやはり某氏よりいただいた。筆者にはこの事実は念頭に浮かばなかったもので、ご意見に感謝したい。もっとも、この用語の重要性は過小評価できないと思われるが、たとえこの語を用いていなくとも、いわゆる概念形、所属形の区別、及びこの区別を持つ名詞の文法的性質については既に金田一、知里、田村のような先行研究者によって述べられており、学史的な重要性はあるものの、「アイヌ語の記述研究における池上先生独自のご貢献」と位置付けるのが妥当なのかどうか、筆者は疑問を持つ。某氏のご真意をおうかがいしたいものである。

l を n でうつして借用したものではないだろうかと考える。アイヌ語はこの語をオロチ語かそれに近い言語から借用したものであろう」と述べている。池上は様々な可能性を慎重に検討しつつ、もともとは「花が咲くもの」を意味する形式ではないかと推定している。アイヌ語では解釈できない inaw に対応する形式がツングース語では解釈でき、しかも借用に際して起こる規則的な音修正によって語形が説明できることを示した点は従来の他言語との類似の指摘に比べれば大きな進歩である。池上の主張の持つ意味は甚大である。もし inaw がツングース語から入ったものだとすれば、この語だけが取り入れられたということは考えられない。他にもこのような気付かれない借用語があるのではないかと推測が当然成り立つ。池上はそのような候補として他に kotan 「村」、itanki 「椀」を挙げる。池上 (2005 : 125) では、佐藤 (2003) の研究を引用して、itanki がアイヌ語最古の文献 (寛永頃書写か) と言われる「松前ノ言」に、「いたき ちやうき」として現れることを指摘し、ツングース語からの借用語と思われるこの形式のアイヌ語への出現が非常に古いことを指摘している。また、池上 (2004 : 226) では他に san 「棚、台」もその種の単語の中に加えている。このような池上の指摘は、アイヌ語が辿って来た道がそう単純なものではなく、広い見地から検討すれば、まだまだ多くの新しい事実が判明する可能性を示していると言える。また、借用元の言語における形態素分析の可否も、今後さらに検討が必要であろう。

池上 (2004 : 199, 280) (「アイヌ語の輪郭」、1969、「日本語・北の言語間の単語借用」、1990年) の日本語との関係に関する指摘も極めて重要である。sákay 「酒をつくるためのひえなどのかゆ」は日本語からの古い借用語で、上代特殊仮名づかいの乙類のケが表す音を写しているのではないかと述べている (もともと、田村 (1996 : 598) では sakaenamte-nima のような語の中に sakae という形で現れており、sakay という語形を基に考えを進めてよいかどうか一考を要するかもしれない)⁶。また、ノミ (祈り) のミは甲類、カミ (神)、ミ (箕) のミは乙類で、nomi, kamuy, muy に対応する、という指摘も興味深い。ただし、この点に関しては甲乙の仮名の区別がないハシ「箸」: pasuy の対応をどう説明するのか、という問題が残ると言える。なお、佐藤 (2006 : 160) はかつては「シ」にも甲乙の別があり、pasuy の suy は「シ」の乙類を反映したものではないか、という可能性を指摘している。

池上 (1983) はアイヌ語と他の言語との歴史的関係の可能性を指摘したものである。しかもこのような可能性を偶然とは考えにくい言語構造上の類似に基づいて指摘したという点で画期的なものである。具体的には、チュクチ語の t-ine-viriŋ-y?e-k 「おれがだれかを守った」の ine- 「だれか」と、アイヌ語の i-nu-an 「われらがものを聞く」における i- 「何か」が、共に不定の目的語を表し、しかも一人称客体を表す形態素とそれぞれの言語で同形であることを述べている⁷。このような形と意味の類似が単なる偶然かどうか、今後も十分検討する必要

⁶ やはり某氏より「池上先生より貸与された録音をかつて聞いたが、沙流方言の話者の発音はアクセントも含めて池上先生が記述された通りであり、何ら問題ないのではないか」というご指摘をいただいた。某氏は筆者のここでの趣旨を誤解されているように思う。筆者がここで言いたいのは、池上先生の記録にしか現れない形式に基づいて重大な結論が導かれる、ということに懸念を述べたのであって、たとえ池上先生の記録自体が正しかったとしても、他の研究者、他の話者による確証がさらに得られるに越したことはないのではないかと、ということである。研究者も少なく、資料も少ない言語にあっては、このようなことは不可避であるが、たとえそれが偉大な研究者による記録であったとしても、決して好ましいことではないということは某氏もよく理解されていると思うのだが。

⁷ Sato (1985) は樺太方言の in- という形式は一人称目的格の形式ではあるが、同じく一人称目的格である i- ではなくむしろ en- や un- のような形式との関係が深いことを述べている。従って樺太方言の in- はチュクチ語の ine- との類似を支持する証拠としては必ずしも適当でないと

があるだろう。ただし、アイヌ語とチュクチ語とでは事情が異なる点についても注意が必要と思われる。Скорик (1977: 117) によればチュクチ語の例の場合はさらに「斜格目的語」を取ることができる(例: Гым т-инэ-тэйк-ыркын орв-эты 「私はいぬぞり(与格)を作っている」)。これに対し、アイヌ語の i-nu-an のような構造は斜格目的語(動作の対象とみるのが妥当な要素)を取ることがない。このような構造上の差異を考慮に入れた上でさらに検討を進めて行く必要があるであろう。

5. おわりに

池上先生のご指摘は鋭く、深いもので、アイヌ語研究者達が今後も検討を続けなければならぬ重要なものが数多く含まれていることにあらためて気付く。池上先生のご研究を土台として、今後も着実な研究が積み重ねられて行くことを祈念したい。

参考文献

知里真志保

1976 『分類アイヌ語辞典植物篇』(『知里真志保著作集 別巻 I』東京: 平凡社)。

服部四郎

1961 「アイヌ語カラフト方言の「人称接辞」について」『言語研究』39. 1-20.

服部四郎(編)

1964 『アイヌ語方言辞典』東京: 岩波書店。

池上二良

1983 「北方諸言語に寄せて」『言語』12 (11): 38-45.

2004 『北方言語叢考』札幌: 北海道大学出版会。

2005 「アイヌ語の itanki とツングース諸語の itangi」津曲敏郎(編)『環北太平洋の言語』12 札幌: 北海道大学大学院文学研究科。

Крузенштерн, И. Ф.

1812 Путешествіе вокругъ света, часть третія. Санктпетербургъ: Морской типографія.

村山七郎

1971 『北千島アイヌ語』東京: 吉川弘文館。

Sato, T.

1985 The First Person Objective Affix in- in the East Coast Dialects of Sakhalin Ainu. *Proceedings of the International Symposium on B. Pilsudski's Phonographic Records and the Ainu Culture*, 157-167. Sapporo: Hokkaido University.

佐藤知己

2003 「酒田市立光丘文庫所蔵「蝦夷記」のアイヌ語について」『北大文学研究科紀要』111: 95-118.

2004 『古文献によるアイヌ語諸方言の比較研究』札幌: 北海道大学大学院文学研究科。

2005 「「申渡」のアイヌ語訳文に関する一考察」『北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要』11: 1-45.

2006 「日本語とアイヌ語」吉田金彦(編)『日本語の語源を学ぶ人のために』京都: 世界思想社。153-160.

言える。

2009 『古文献によるアイヌ語史の構築』札幌：北海道大学大学院文学研究科.

Скорик П. Я.

1977 Грамматика чукотского языка, часть вторая. Ленинград: издательство наука.

Словарь сахалинского языка (北海道大学附属図書館所蔵、494.6、D319、621139) .

田村すず子

1996 『アイヌ語沙流方言辞典』東京：草風館.

豊原熙司、川上淳、本田克代

1996 「根室地方で採録されたアイヌ語」『根室市博物館開設準備室紀要』10 : 91-110.

上原熊治郎

1792 『藻汐草』

The Late Prof. Ikegami's Study of the Ainu Language

Tomomi SATO

Graduate School of Letters, Hokkaido University

1. Introduction
2. Dialects of the Ainu language
3. The structure of the Ainu language
4. The historical relationships between Ainu and neighboring languages
5. Conclusion